様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　6 月　8 日現在

機関番号：24403
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：19791777
研究課題名（和文）10 代で出産した母親の発達過程
ーグループアプローチを通じた経年的変化の分析
研究課題名（英文）Developmental process of Teenage mothers:
Longitudinal studies at peer group of teenage mothers
研究代表者
大川聡子（OKAWA SATOKO）
大阪府立大学・看護学部・講師
研究者番号：90364033

研究成果の概要（和文）：
本研究では、若年出産母親のピアグループにおいて経年的インタビュー調査・フィールドワークを行い、若年出産母親の生活実態とそのニーズを分析した。調査結果から、若年出産母親たちは自らに母親役割を課すことで、これまでの生活を大きく変更することができていた。ピアグループに参加することで悩みを相談し合う仲間を作り、10代の母親としての振る舞いを学ぶなど、多くのものを得ていた。10代の母親たちが社会化していく過程を支援するために、現状の子育て支援だけでなく、就業支援、福祉施策の情報提供，ピアグループ等による支援が必要であると考えられた。
研究成果の概要（英文）：
In this research, longitudinal interview investigation and fieldwork were performed in the Teenage mothers group, and the actual condition of teenage mother's life and their needs were analyzed. As a result of the interviews, it has been recognized that teenage mothers are actively utilizing self-control as mothers for their self-socialization as they considerably change their lifestyles by putting themselves in the role of mother. Also, these mothers are able to learn how to conduct themselves as teenage mothers, making friends to whom they can talk about their worries, by joining peer groups. It was recognized that not only current child-support programs but also employment supports, welfare information services and peer group supports are necessary in order for teenage mothers to become socialized

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,200,000	0	1,200,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	188,469	56,640	245,009
2010 年度	811,531	243,460	1,054,991
年度			
総　計	2,700,000	450,100	3,150,100

研究分野：地域・老年看護学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：若年妊娠・出産、グループ支援、ペアレンティング、発達過程、育児支援

１．研究開始当初の背景

2001年の10代の人工妊娠中絶件数は46,511件（母体保護統計）であり、年々増加傾向にある。しかし、同年の 10 代の出生数は 20,965 件（人口問題研究）であり、出生数も年々増加している。妊娠した 10 代の女性が、自分の将来の夢や、10代としての生活を楽しむことと引き換えに、なぜ母親となることを選んだのか。その背景には何か共通する要因があるのではないかと考え、10代で出産した女性 12 名に聞き取り調査を行った。しかし、1回のインタビューで彼女たちの全体像をつかむことは難しく、また、今後離婚や再婚、両親との別居など、家族関係の大きな変化にともない、育児に対する姿勢や母親としての成長に変化がみられると考えられる。そのため、期間内（子どものライフイベントのある時期）に再度調査を行い、10代の母親について長期的な視点で解釈し、そのサポート方法を検討したいと考えた。

２．研究の目的

本研究では、女性が 10 代で出産することの意味を、発達段階と照らし合わせながら考察し、彼女たちが母親としてどのように生きているのか、その全体像を明らかにし、彼女たちをサポートするための母子保健システムのあり方、援助者のかかわり方を検討する。

３．研究の方法

(1) 若年出産支援が乏しいわが国の現状とアメリカ・イギリスの若年母親の社会的背景や支援のあり方と比較し、必要な支援について分析する。

(2)10代母親へのインタビューの実施と分析

10代で出産した女性12名、それぞれのライフイベントにあわせた時期にインタビュー調査を行う。インタビューから得られた内容をもとに10代の母親がおかれている現状を総合的に分析し、現状の母子保健システム等の社会的サポートシステムを評価し、より効果的な方法について検討する。

(3) 10代母親を支援する住民ボランティアへのインタビュー調査

(2) の結果から、10代母親のニーズとして、他者から母親として認められることが挙げられた。このことから、若年出産母親サポートグループに保育ボランティアとして参加している更生保護女性会メンバーへのインタビューを行ない、地域住民ボランティアの若年出産母親に対する認識を明らかにし、母親が生活する場である地域において、住民との紐帯を築くための方法について考察した。

(4) 具体的な社会的サポート方法の検討

(2) の結果から、若年出産母親達が主体的に出産を選択する動機づけとなるものは、育ち直しと自立への願望であり、それを後押しするのが若年出産母親の家族の存在であると考えられた。若年出産した母親には、出産後も若者である若年父親の不安定就労や父性を構築する機会のなさ、あるいは父親モデルの不在、子育て中の母親の就職難、母子家庭問題等、様々な社会的不利な要因に立ち向かっていかなければならない。こうした、包括的かつ若年固有のニーズを持つ母親について、具体的支援内容を検討した。

４．研究成果

(1) 10 代の出産をめぐるアメリカ、イギリス、日本の支援の方向性と家族のあり方の差異についての分析を行なった。アメリカ、イギリスにおいては 10 代で出産した親の社会的背景に関する調査が進んでおり、貧困や教育到達度の低さ、社会階層との関連が明らかになっている。しかし、わが国ではこうした社会的背景への視点が乏しい。

社会的背景に目を向けにくい理由として、①若年で出産する者の婚姻率が高く、家族としての形を成すために問題が表面化しないこと（母子家庭ではないために、支援が必要な存在であるとみなされにくい）②結婚後もパートナーや原家族の支援が受けやすい環境にあること、③家族の支援がない場合、既存の社会資源を活用しているため、固有のニーズが表れにくいことの 3 つが挙げられた。

アメリカやイギリスでは、若年出産母親の社会的背景を踏まえた公的支援が行なわれていたが、わが国においては、出産後も家族からのインフォーマルサポートが受けられることから、アメリカやイギリスで提供されている公的支援の役割を、家族が担っていると考えられた。アメリカやイギリスでは、こうした家族からの支援が望めないため、日本では家族が担っている役割を公的支援として提供していると考えられた。

(2) 10 代母親に対するインタビュー結果から、10 代の母親たちは自らに母親役割を課すことで、これまでの生活を大きく変更することができていた。また、サークルに参加することで悩みを相談し合う仲間を作り、10 代の母親としての振る舞いを学ぶなど、多くのものを得ていた。母親たちのニーズとして、同世代の友人、家族を頼れない場合の育児支援、周囲の人々に母親として認められること、公的サービスや就労につながる資格の情報提供が挙げられた。

21、22 年度は、ライフプランにテーマを絞ったインタビューを行ない、10 代の母親がどのような生活設計をし、どのような支援を必要としているかについて分析した。インタビュー結果から、10 代の母親たちは、自らのライフプランを構築することは「怖い」という思いを持っており、家族計画の知識については個人差が大きかった。こうした母親たちのニーズと実態から、出産や就労など今後のライフプランを立てることで、将来の目標が明らかになり、貯蓄や就労の準備や家族計画など、目標を実現するための行動を起こすことができると考えた。

(3) 住民ボランティアインタビューの結果から、ボランティアは若年出産母親たちを見守ることで、母親たちと関係を構築していると考えられた。10 代母親のように、社会的なニーズを持ち地域から孤立しやすい人々と、地域住民を仲介する役割として、保健師の役割は非常に大きいと考えられた。10 代母親が地域住民との紐帯を築き、コミュニティとつながることにより、育児をしやすい地域づくりや、社会的不利な状況から移動をもたらす機会を作ることができると考えられる。

(4) 10 代出産母親への支援

① 経済的問題に対して

こうした若年世代、もしくは就労を希望する母親に対しての就労支援は急務である。母親に対する就労支援はマザーズハローワーク等で行なっているが、高等学校を中退している等、低学歴である母親は就労先を見つけることがより困難である。また公的サービス

や就労に向けての情報について、わが国においては市町村の担当課窓口やマザーズハローワーク等で行なわれているが、若年出産母親に特化したものではない。彼女たち自身は専門職であり、求人数も多いホームヘルパーへの関心は高いが、教育到達度が低く、就労経験が乏しく、さらに子どもを抱える母親といった、社会的に不利な条件を抱える若年出産母親達にとって、職業的社会化は非常に困難である。こうした若年出産母親達に対して、イギリスでは、Care to Learn プログラムとして、20 歳以下の男女が、教育や職業訓練を受けている間の保育料を支払う制度や、16 歳以下で妊娠した母親が義務教育を修了するために様々なコースを準備している。また、親としてのスキル，育児，教育，住居について相談するアドバイザーも存在するなど、社会的に不利な状況を改善するための具体的な支援が行なわれている。わが国においても、現状の子育て支援だけでなく、就労と学業も含めた、包括的な支援の提供が必要だろう。

また、こうした社会的不利の世代間連鎖を防ぐために、子どもが中学、高校に進学した後も希望すれば学業を継続することができるような、就学に結びつくための直接的な経済的支援が必要である。

② 教育の問題に対して

これまで、学校等教育機関と子育て支援機関の連携がなされてきたとは言い難い。学業を修了した後、多くの母親は就労し、結婚してから妊娠、出産に至るため、教育から子育てに至るまでの期間が長い。しかし若年出産母親においては、教育機関を修了あるいは離脱した後の期間が短く、出産、子育てをすることとなる。教育機関と子育て支援機関が連携し情報を共有することで、こうした若年母親のニーズを早期に見出し支援に投げることができると考えられる。

③ 家族の問題に対して

10 代母親の夫も自身の父親とのかかわりが少なかったために、自らの父親像を持っておらず育児に全く関わらない父親もいた。伝統的母親役割を肯定する若年母親は、そのことを特別問題視しておらず、夫の気持ちを推し量ったり、夫と家族内の役割を調整することで、家庭を機能させようとしていた。しかし、こうした負担を母親のみに負わせるのではなく、父親が父性を育てることができるための、父親同士が集まり交流できるような場の提供が必要であろう。

さらに、若年出産母親と同居あるいは近居で育児を支援してくれる人の有無が育児の負担感につながっており、育児を手伝う人が全くいない若年母親は、育児疲れを強く感じていた。若年出産母親の支援は家族に帰されているが、全ての家族が機能しているわけではなく、むしろ両親との関係が構築できなかった若年母親も多い。家族の支援実態を把握し、適切な支援を受けることができているか確認し、必要であれば地域の育児支援サービスを紹介することも必要であろう。

④ 若年で子どもを持つことに対して

若年で子どもを持つことに対して、若年母親は若者でもあり、母親でもあるという事を重視し、10 代という青年期であり続けるための、同年代の仲間づくりの支援も必要であると考えられる。若年母親たちは、ピアグループに自主的に参加し、悩みを相談し合ったり、母親としてどうあるべきかを学んだり、母親としての自己認識を深めるなど、多くのことを学んでいた。若年母親たちは、学業を中断

したことにより同世代の若者たちが共同生活を営む場から離脱しており、集団生活で得られる友人関係や連帯感、何か一つのものを行なったときの達成感などを得られる機会に乏しい。こうした若年母親たちにとって、若者同士が集まる場を提供することは意義深いと考える。

また、若年で子どもを持つことに関しては、他者に母親として認められることの困難さが若年母親から述べられた。若年母親は、自分自身を理解してもらいたいと努力をしているが、児童虐待のリスクであると一般的にはとらえられていることもあり、周囲からの反応に傷つく母親たちもいた。このことから、地域住民が若年母親を理解する機会を作ることで、住民の若年母親に対する偏見が緩和され、若年母親が子育てしやすい環境を作る一助となると考えられる。

これらの支援を包括的に提供するために、総合的支援を行なう相談員（あるいは窓口）を設置し、1ヶ所に相談することで包括的な支援が提供できるような体制を整えていくことが必要であると考えた。また、若年出産母親に関わりたいが、距離の取り方の難しさを感じている地域住民もいることから、若年出産母親に関わりたいという思いを持つ住民ボランティアを育て、若年母親と住民ボランティアをつなげていくことも必要であると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①大川聡子，10代の母親が社会化する過程において、顕在化する支援ニーズ，立命館大学産業社会論集，46(2)，pp67-88，2010.

②大川聡子，10代の出産をめぐる家族の調整，アメリカ、イギリス，日本の社会構造の比較を通して，立命館大学産業社会論集，45(1)，pp207-228，2009.
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/sansharonshu/451pdf/04-04.pdf

③大川聡子，親役割への支援－10 代で出産した母親の事例を通して，周産期医学，38(5)，pp529-533，2008.

④大川聡子，若年父親・母親の社会的背景と支援のあり方：イギリスの事例を通して，大阪府立大学看護学部紀要，14(1)，pp51-56，2008.
http://ci.nii.ac.jp/els/110006996667.pdf?id=ART0008908246&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1307599266&cp=

〔学会発表〕（計４件）

①Satoko Okawa，Clarification of support needs in the process of teenage mothers，The 12th East Asian Forum of Nursing Scholars，South Korea，2011年2月11日.

②大川聡子，イギリスの若年父親・母親の社会的背景と支援のあり方，第 27 回日本思春期学会，千葉，2008年8月8日.

③大川聡子，10代で出産した母親に対するグループアプローチの効果－自分らしく「親」になること，第 66 回日本公衆衛生学会，愛媛，2007年10月24日.

④幾島里恵，磯野桂子，坂井麻耶，上野昌

江，大川聡子，看護職者が抱く 10 代の母親に対する認識の変化，第 65 回日本公衆衛生学会，富山，2006年10月27日.

〔その他〕

2011/02/18

調査結果の一部（雑誌論文①）が、京都新聞連載「ひとりじゃないよ」に掲載される。

６．研究組織

(1)研究代表者

大川 聡子（Satoko　Okawa）

大阪府立大学・看護学部・講師

研究者番号：90364033